

# Charles Williams と T.S. Eliot の殉教劇

— *Thomas Cranmer of Canterbury* を中心に —

佐 伯 恵 子

カンタベリー・フェスティバルを創始したのは George Kennedy Bell である。彼は 1924 年から Dean of Canterbury Cathedral を務めたのち、1929 年に Bishop of Chichester に任命される。もともと詩集を出版し、演劇経験もあった Bell は、John Masefield に声を掛けて 1928 年に *The Coming of Christ* の上演を成功させる。教会内部、聖堂の身廊で劇が演じられたということが画期的なことであった。その後、彼は E. Martin Browne を Director of Religious Drama に起用し、カンタベリー・フェスティバルを立ち上げる。1932 年には Alfred Tennyson の *Becket* が上演され、翌年の再演を経て、1934 年には Laurence Binyon の *The Young King* が上演される。<sup>1</sup>

Bell が係わったカンタベリー・フェスティバル 20 年の歴史の中で最も注目されたのは、1935 年の T.S. Eliot の *Murder in the Cathedral* (以降、*Murder*) とその翌年の Charles Williams の *Thomas Cranmer of Canterbury* (以降、*Cranmer*) である。前者は 13 世紀の Thomas Becket の殉教を描いた劇、後者は 16 世紀の Thomas Cranmer (1489-1556) の殉教と宗教改革をめぐる劇である。いずれも、カンタベリー大聖堂の the Chapter House で上演されている。しかし、*Murder* が、詩人としてすでに成功を収めていた T.S. Eliot の初の本格的詩劇として注目を浴び、詩劇作家としての着実な第 1 歩となり、各地で再演もされていったのに対し、*Cranmer* の方は当時ほとんど評価されず、アマチュア劇団以

---

1 *The Coming of Christ* から *The Young King* の上演に到るまでの経緯については Pickering 第 4・5 章に詳しい。

外の上演はなく、アメリカでも1960年の学生による上演のみであったという (Browne, *Two* 101)。それでも、著名な詩人Eliotの詩劇の翌年の上演であるということもあり、*Cranmer*は何かと*Murder*と比較されてきた。

Dixonは、儀式的な形式、殉教、blank verseとの訣別、といった点で両作品の類似を認めるものの、Williamsのインスピレーションの源泉はEliotとは別のところにあると述べる (38)。例えば、*Cranmer*に登場するthe Skeletonという謎めいた人物は、*Murder*に登場する誘惑者 (Four Tempters) に相当する特異性を持つが、その性質は*Everyman*のDeathや*Job*のSatanに近いと指摘する (38-39)。また、Pickeringは、慣例にとらわれない形式、実験的な言語、儀式の使い方の面白さ、現実離れた所作、コロス風の動き、主人公の精神の葛藤と殉教などを両作品の類似点とする一方で、*Cranmer*におけるコロス (the Singers) は、*Murder*におけるコロス (A Chorus of Women of Canterbury) とは別の機能を持ち、その役割は多岐に亘ると指摘する (204)。

EliotとWilliamsは双方の詩劇上演を契機として友情を深め、お互いに尊敬しあい、作品にも影響を及ぼしあう関係を長く続けていくことになる。Wellsは、二人が自分の宗教劇のヴィジョンを実現し、宗教劇の新しい流派を作り出したと指摘しているが (168)、本論では、二人がそれぞれに意表を突く場面を最後に入れ込んでいる点に目を向けたい。具体的には、*Murder*における誘惑者の最後の台詞と、*Cranmer*の終幕でCranmerがthe Skeletonと交わす最後のやり取りを比較する中で、WilliamsとEliotの殉教劇としての斬新さとその方法の違いに注目する。しかし、まずは、日本でも上演されたことのない詩劇*Cranmer*を概観するところから始めなければならない。

## 1. 詩劇 *Thomas Cranmer of Canterbury*

Bishop Bellは、カンタベリー・フェスティバルを強力にバックアップしていくthe Friends of Canterbury Cathedralを1928年に設立し、マネージャーMargaret Babingtonと演出家Browneと共に、Eliot、Williamsに相次いで詩劇

を依頼する。敏腕マネージャー Babington から “Mr. Williams, I have one request to make. So far, every Festival hero has been carried out dead from the Chapter House: could you choose one who needn't be?” と依頼を受けた Williams は “Cranmer: he ran to his death” と即答した、というエピソードを Browne が紹介している (*Two* 101)。Williams がこの時、*Murder* の Becket が カンタベリー大聖堂になだれ込んできた騎士たちの剣に刺し貫かれる終幕を念頭に置いていたことは明らかである。“ran” という語は、やがて舞台上に鮮烈な形で表現されることになるが、同時に、Cranmer が最期で見せる自らの信仰に殉じる強い意志を表現することが最初から意図されていたことがわかる。

Williams の詩劇 *Thomas Cranmer of Canterbury* は、King Henry VIII の時世 (在位 1509-47) における絶頂期から Queen Mary (在位 1553-58) の迫害による転落までを描いた Thomas Cranmer の 28 年間の物語である。Williams の書き下し詩劇を省略した形で上演された。<sup>2</sup> 「Cranmer の魂の葛藤が劇の中心である」と Browne は指摘しており (“Introduction” 12)、終幕の場面がそのことを示しているが、実際には Cranmer が殉教へと追い込まれていく過程には、宗教改革に絡んだ政治の問題と、Cranmer の聖位剥奪をめぐる個人的かつ宗教的な問題とが複雑に絡み合う。Dixon の言葉を借りれば、「公的にはカトリックとプロテスタントの対立を含み、私的には Cranmer の自分自身との葛藤を含んでいる」(41) のである。

実際に扱われているのは、国王 (Henry VIII, Edward VI, Mary I) が 3 代に亘って推移し、宗教改革の嵐が吹き荒れ、改革派と非改革派の対立の中で多くの血が流され、その間に、イギリス国教会が設立され、聖書の英訳とイギリス国教会祈祷書 (*Book of Common Prayer*) が編纂され、『四十二個条』 (*Forty-Two Articles*) が完成に到るといふ、イギリスにおける重要な宗教的事件が起こった時代である。きわめて多様な歴史的事実が舞台上で必ずしも演じられるわけではなく、場面転換がないままに次々と展開してゆくという、時間的にも内容的

2 *Cranmer* の上演は 1936 年 6 月 20 日から 27 日。上演脚本が入手できないため、本論では書籍版を用いる。

にも「万華鏡的に歴史を圧縮した」(Browne, *Two* 102) 作品になっている点が難解さのひとつと言える。書籍版にはWilliams自身が、区切りなく展開する各場面の出来事と年代を示す小見出しをつけている。まず、脚本にBrowneがつけた各場面のタイトルと併記する形で全体の流れを辿ってみる。下記年表の左側が上演用脚本、右側が書籍版である。

<p>Part One</p> <p>1 Cranmer at Cambridge – 1528</p> <p>2 The Archbishopric: Catherine and Anne – 1529</p> <p>3 The Fall of Anne Boleyn: The Dissolution of the Monasteries – 1534-36</p> <p>4 The English Bible – 1537</p> <p>5 The Attack on Cranmer – c. 1545</p> <p>6 The Death of King Henry – 1547</p> <p>7 The Reign of Edward VI – 1547-53</p> <p>8 The Western Rebellion – 1549</p> <p>9 The Book of Common Prayer – 1549-52</p> <p>Part Two</p> <p>10 The protestant Ascendance – 1552-53</p> <p>11 Mary: The Catholic Reaction – 1553-58</p> <p>12 The Degradation – 1555-56</p> <p>13 The Recantations – 20 March 1556</p> <p>14 The Repentance and The Death – 21 March 1556</p> <p>※上記の通し番号はDixonによる (41)</p>	<p>Part One</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Cambridge 1528</li> <li>・ 1529</li> <li>・ The Archbishopric 1533</li> <li>・ 1534-6</li> <li>・ The English Bible 1537</li> <li>・ 1545</li> <li>・ The death of King Henry 1547</li> <li>・ Edward VI 1547-53</li> <li>・ The rebellions 1549</li> <li>・ The Book of Common Prayer 1549-52</li> </ul> <p>Part Two</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1552</li> <li>・ 1553</li> <li>・ Queen Mary 1553-58</li> <li>・ The Degradation – 1555-6</li> <li>・ 1555</li> <li>・ 1556</li> <li>・ The Recantations 1556</li> <li>・ The Martyrdom 20 March 1556</li> <li>・ 21 March 1556</li> </ul>
---	---

上記の年表に沿う形で、Cranmerの火刑までの28年間を概観してみる。Cranmerが1526年に神学博士になったのち、ケンブリッジで学問と乗馬にいそしむ1528年から劇は始まる。Cranmerは1533年、Anne Boleynとの結婚を希うHenry VIIIによってカンタベリー大主教に任ぜられ、二人の結婚を認める

が、1536年には不義を理由にAnneは処刑されてしまう。<sup>3</sup> その翌年、誰もが読めるようにと、聖書の英語訳が行われる。1545年頃には、プロテスタントに理解を示すCranmerに対する糾弾がなされるが、Henry VIIIがCranmerを守り通す。そのHenry VIIIが1547年に崩御し、10歳で即位したEdward VI（在位1547-53）は貴族たちに牛耳られてゆく。この間も、聖体の実体変化の解釈、英語によるミサや聖書の是非、膝を折る礼拝の姿勢や偶像崇拜をめぐるカトリックとプロテスタントの争いは続く。Part Oneは、民衆の希望に応じてCranmerがイギリス国教会祈祷書を編纂するところで終わる。

Part Twoに入っても、改革派と非改革派との争い、教会儀式の混乱、聖餐式で膝を折る礼拝や聖体の実体に関する対立が続く。そのような中で、改革派からはカトリックに寛容すぎると責められ、非改革派からはプロテスタント寄りの態度を批判され、どっちつかずの態度を守るCranmerは次第に追い詰められてゆく。1553年には貴族たちが幼少のEdward VIをロンドン塔に幽閉したという噂が流れ、まもなくEdward VIの死去が伝えられる。そのあとを受けて、Mary Iが即位すると同時に、カトリックが圧倒的に優勢になる。<sup>4</sup> Edward VI時世下にいた司教たちは逃亡し、Cranmerが恐れたよりも急速に女王による弾圧が始まる。Bloody Maryの通称どおり、プロテスタント派への弾圧・処刑が相次ぎ、Cranmerも異端を咎められ、ロンドン塔に送られる。1555年には聖職位が剥奪され、貴族たちが次々と女王に寝返る中、処刑を恐れたCranmerは教皇と女王への服従を誓うが、火刑宣告が下されてしまう。Cranmerは過去のプロテスタント寄りの自説を撤回する署名まで行すが、火刑宣告は覆されることは

3 同年には、改革派、保守派折衷の形で『十箇条』(Ten Articles)が制定された。十箇条のうち5つは教義に関するもの(使徒信条、洗礼、告解、実体変化、信仰義認)、5つは儀式に関するもの(偶像、聖者への祈り、典礼、儀式、煉獄)で、プロテスタント寄りの内容であったために暴動が起こることが懸念されたが、Cranmerは腐敗したカトリック教会と袂を分かち、新しい教会を作るべきであるという信念のもとに実施した。しかし、実際にこれ以降、イングランド北部でHenry VIIIの宗教改革に対して反乱が続くことになる。(Weatherall 83-91)

4 Edward VIの次に女王として宣言されたLady Janeは9日間で廃位となり、のちに処刑されてしまう。

なかった。1556年3月21日、Cranmerは、自分の意思に反して神を否定し真実から目を背けてしまったことを悔い、自説撤回の署名をした右手を先に焼いて火刑を受け入れる。

上記のように、詩劇*Thomas Cranmer of Canterbury*は、怒涛のように推移する宗教改革の嵐に加担し、同時に翻弄されてゆくCranmerの物語を中心に展開してゆく。数多くの出来事は舞台上で演じられることはなく、言葉で説明されるのみである。登場人物の多くは個人としてよりも観念を体現し、その代弁者として行動しているだけであり（Pickering 207）、演出家のBrowne自身も「十分に人間らしい人物はHenry VIIIとCranmerだけである」（*Two* 103）と認める。しかし、登場人物に人間的深みを持たせるのは困難であるにせよ、次々と複雑に変化する出来事が手際よく盛り込まれ、整理されている。万華鏡的に推移する時間の流れに関しては、各場面の見出し（めくり）を舞台袖に置いて、紫と緑のテューダー朝の衣装を身に着けた子どもが一枚ずつめくっていく、という手法がとられたという（Pickering 207, Dixon 41）。

このように演出に工夫はされているものの、観客にとって難解な劇であったことは書籍版を読んでも想像に難くない。とはいえ、「Eliotの*Murder*以降のカンタベリー・フェスティバルの中では最も興味深く記憶に残る作品で、再演に値する」<sup>5</sup>と評されているように、作品への評価は高い。Pickering自身は「*Murder*よりも一層独創的なものとなり、戦後の（劇作品の）発展の先駆けとなった」（198-99）と評している。劇評を概観すると、評価のポイントは2つある。ひとつは役者の演技に関するもので、Cranmer、Henry VIII、the Skeletonを演じた役者の演技は高い評価を受けた。the Skeletonに関する評は後述するとして、Cranmer役のRobert Speaightは、自ら演じた*Murder*のBecketと比べてCranmerは学者ぶって堅苦しく、しかも揺れ動く人物とあって、その弱さを表現するのが難しかったと述べているが（Dixon 45）、その演技は「鮮やかで感動的」「知的で威厳があり誠実」「激しさを抑え感情を抑制した末に最後の

5 舞台装置や衣装を手掛けたLaurence Irvingや演出家Browneへのインタビューの録音記録より。Cf. Pickering 197, 342.

場面で劇的な高まりへと上昇する」というように高い評価を受けた (Dixon 49-50)。

劇評のもうひとつは作品自体についてである。*The Times* では「書かれた韻文を読むと読者はがっかりするが、上演されてみると中間韻や頭韻が思いがけない効果を上げている」と上演版の方が高く評価されている (Dixon 50)。その一方で、*Kentish Gazette* では、Cranmer が Henry VIII に英語版聖書の必要性を説く場面を例に挙げ、「韻律が際立っており、その美しさは忘れられない。(中略) 作り上げられた一語一語が神聖なまでに美しい」(Pickering 212) と評され、これは上演版のみならず書籍版にも通じる高評価である。いずれにせよ言葉の力と美しさが高く評価されたものの、台詞の難解さ、時間の流れの複雑さ、アクションの少なさなどが批判点となった。これらをまとめると、「劇というよりは儀式」「行為というよりは言葉」「耳と知性では満足できても目がたどれるものはほとんどない」という *The Criterion* の寸評に集約されるだろう (Smith 141-42)。

確かに前述のように、様々な歴史的出来事と宗教的対立と次々に優位の入れ替わる人物関係と Cranmer の心理の揺らぎとが、場面の区別もないままに途切れなく展開してゆく複雑さがこの劇の特徴である。その複雑さを何とかスムーズに整理しようとしたもうひとつの大きな工夫が、the Skeleton という特異な登場人物の存在であった。場面を自在に操り、Cranmer の内面に働きかけ、劇の進行役も果たし、縦横の働きをする the Skeleton の多様な役割がこの作品の面白さでもあり、同時に、それが観客の混乱の原因ともなったようである。ここからは the Skeleton に目を向けてみることにする。

## 2. the Skeleton

the Skeleton は劇中の様々な人物や出来事や行動に絡んで、舞台上を縦横に動き回る重要な登場人物であるが、その姿は誰にも見えない設定になっている。主人公の Cranmer でさえ、その姿を見るのは最後の場面のみである。the

Skeletonを演じたのは演出家のBrowne自身である。顔には骸骨のマスクを着け、全身黒い衣装で、その上に白い骨の図柄が描かれ、黒に緑の縞模様のマントを羽織っている。首の周りには緋色の布が巻かれ、頭の周りには緑の蔦と金色の穀類のリースをつけている。<sup>6</sup> Laurence Irvingが手掛けたこの衣装は、黒いタイツと白い骨、黒いマントと頭の緑の蔦や金色の穀類、避けがたい死と生の兆しという対照を暗示する、とBrowne自身は説明している (*Two* 104)。Pickeringも同様に、“an attempt to suggest the promise of life through death” (209) と指摘し、DixonもインタビューでのBrowneの別の発言“the life achieved through death”を紹介している (44)。Browneの痩せた長身がこの役によく合ったようで、「時には人を寄せ付けない不気味さを、また別の場面では辛辣さと痛烈さを示し、小鬼のように跳ね回って内なる恐怖を体現している」という *Kent Herald* (June 26<sup>th</sup> 1936, 7) からの劇評を受けて、Pickeringは「the Skeletonには中世的な悪玉 (Vice) の要素がある」と述べている (209-10)。

Browneの演技は高く評価されたものの、the Skeletonの意表を突く外見や、死を体現しながら生をも暗示しているという二重性のみならず、劇中での役割と働きの多様さが観客の戸惑いを引き起こしたことは想像に難くない。<sup>7</sup> 何よりも、the Skeleton自身が繰り返す自己定義自体が多様なのである。劇の冒頭、Henry VIIIはCranmerをカンタベリー大主教に据え、怖れるCranmer——“I am purblind, / weak” (9)<sup>8</sup>——を急き立ててAnne Boleynとの結婚を認めさせる。その直後、口々にあるべき道を探し求めて右往左往する聖職者や説教者、平民、貴族らを横目に見ながら、the Skeletonが観客に向かって自己を語る——

... I am the way,

6 Browne, *Two* 104, Pickering 209, Dixon 44 参照。Browne, *Two* 105, Pickering 210 にはモノクロの舞台写真が掲載されているが、衣装と雰囲気を確認できる手段はこれのみである。

7 ただし、チケットの売れ行きは好調で、観客の反応は“excitement and joy”だったようである (Dixon 45)。

8 これ以降、*Cranmer*からの引用は書籍版を用い、本文中にページ数のみを記す。



I the division, the derision, where  
 the bones dance in the darkening air,  
 I at the cross-ways the voice of the one way,  
 crying from the tomb of the earth where I died  
 the word of the only right Suicide,  
 the only word no words can quell,  
 the way to heaven and the way to hell.

*[He goes round the stage, singing]*

I am the way, the way to heaven;  
 who will show a poor blind beggar the way to heaven?  
 I am the way, the way to hell,  
 who will teach a poor blind beggar the way to hell?

*[The figures break into movement]*

I am the way, the way to salvation,  
 who will desire the way of salvation? (12-13)

“d” と “w” と “h” を多用した韻律が呪文のようにリズムカルに耳に流れ込んでくるが、対立・矛盾・相反するものを同時に内包するパラドックスに満ちた謎のような自己定義が観客を戸惑わせる。<sup>9</sup>

9 Williams自身にとってはそのようなパラドックスは矛盾でも不合理でもなかったとした上で、Browneは、Williamsが相反するものの中に仕切りが存在しないことを当然のことと捉える稀有な作家であると指摘する。Cf. “I have never met any human being in whom the divisions between body and spirit, natural and supernatural, temporal and eternal were so non-existent, nor any writer who so consistently took their no-existence for granted.” (101)

またDixonによれば、Williamsは*Reason and Beauty in the Poetic Mind*の中でthe Skeletonに言及し、どの時代にもそれに見合ったthe Skeletonがあるのだと述べている。Cf. “... the life of the skeleton is its own doubled life, and marriage with the skeleton is perhaps after all the wisest intercourse with it — meaning by that all that marriage involves of intimacy and of strangeness, of friendship and hostility, of freedom and captivity, and something like a new life.” (Dixon 42)

この冒頭の自己定義が示すのみならず、実際the Skeletonは劇中で多様な役割を与えられている。まずthe Skeletonは、登場人物の行く末を暗示し、ストーリーの進行役を務める。例えば、Henry VIIIの怒りを持ったAnne Boleynを自分のマントで包み込み、処刑を暗示する(14)。Henry VIIIから王冠を取り去り、退場へと導き、その死を宣言する——“Ohé, the King is dead”(25)。3回繰り返されるこの台詞は、国王の死と治世の転換を印象づける以上に、Cranmerに対して現実を突きつけ、これ以降庇護を失い世間の批判にさらされることになる警告を行う。

あるいは、その存在に気づかない様々な人物に歩み寄ることで、the Skeletonは観客の視線を巧みに誘導する。Henry VIIIの命により紋章を鶴からペリカンに変更させられ<sup>10</sup>、国王の庇護下に取り込まれていくCranmerに対して、the Skeletonは予言者的な台詞——“My hour is not yet come, but I will show / a little prelude of the hour of you and me.”(20)——を述べた後、貴族たちの背後に立つ。それに押されるように、貴族たちがCranmerに対する疑念、警戒、批判を口にし、やがてCranmerが騒動、暴動、反逆、陰謀の危険人物となることを国王に進言する場面(20-22)へと続く。そしてthe Skeletonは、その先にCranmerが立たされることになる苦境——“difficult life, difficult death”(22)——を暗示し、その行く末に寄り添う意志を示しつつ——“I must divide / his life to the last crack and pull his soul / — if it lives — through the cracks”(22)——国王に何かを耳打ちする。

この直後、Henry VIIIは死去して、Edward VIの治世となり、カトリックとプロテスタントの争いが激化する中、民衆の期待に応じてイギリス国教会祈祷書の執筆を続けるCranmerのもとにthe Skeletonが忍び寄る。執筆の無理が祟り、視力の衰えたCranmerにはthe Skeletonの姿は見えない。気配を感じて“Are you of my household?”と問うCranmerに、the Skeletonは“An indweller ... / a

10 Cf. THE KING They [Cranmer's coat of arms, three cranes] shall be pelicans, pelicans in their love, feeding their thankless young on their own blood. I have changed them; see it done. (20)

copier-out, a carrier-about / of works and words, an errand-runner” と答える (34)。さらに “What are you called?” と問いかける Cranmer に the Skeleton は次のように自己定義してみせるのである——

Anything, everything;  
fellow, friend, cheat, traitor.  
.....  
My name, after today's fashion, is latinized  
into Figura Rerum. ...  
.....  
I will call you, for you bade me show you the end,  
no more servant now, but friend.  
.....  
Do not fear; I am the nothing you meant.  
I am sent to gather you into that nothing.  
.....  
If I leave you to peace I shall leave you to lie,  
to change without changing, to live without living.  
.....  
You believe in God; believe also in me;  
I am the Judas who betrays men to God. (34-35)

パラドキシカルな自己定義は民衆に対しても Cranmer に対しても変わらないが、the Skeleton は Cranmer の運命を知る存在であることがわかる。the Skeleton は、死と生を同時に象徴し、天国にも地獄にも救いにも通じる道を体現する存在であると同時に、Cranmer が「嘘をつき、変化なき変化をし、生なき生を生きる」道へと追い込まれることになる行く末を示してみせる。神を人間に売るユダならぬ「人間を神に売るユダ」は、Cranmer を殉教者として神に導く「救

いへの道」をこの段階で示してみせるのである。このようにthe Skeletonは、Cranmerを鼓舞し、誘導し、その背中を押し、冷徹に現実や心の中の弱さに向き合わせ、終幕の死へと突き動かしてゆく。その最終段階でthe Skeletonは、Cranmerの人格の延長、あるいはほとんどCranmerと同化している。処刑が決定したCranmerに対して、the Skeletonは次のように告げる――

... You shall see Christ,  
 see his back first — I am his back.  
 .....  
 I am Christ's back; I without face or breath,  
 life in death, death in life,  
 .....  
 Rejoice, son of man, rejoice:  
 this is the body of Christ which is given for you;  
 feed on it in your heart by faith with thanksgiving. (54)

この最後の部分は、最後の晩餐と聖餐式を思わせる一文<sup>11</sup>ではあるが、そもそもCranmerが係わり、また巻き込まれた論争の中でも極めて重要であったのが聖餐の実体変化に関するものであった。最後の晩餐とそれを再現する聖餐式において、パンと葡萄酒がその実体を失い奇跡的にイエスの血と肉に変化すると考えるカトリックか、そこにイエスの実体は存在せず象徴としてあるにすぎないとするプロテスタントか、その折衷を取るルター派の共在説かが激しい論争の焦点となった。当のCranmerはあくまでも聖書の権威を重視し、神の恩寵は聖餐を通して与えられるが、儀式や典礼に固執することは受け入れがたいという立場を取った。そして何よりも聖餐への敬意を蘇らせ、聖餐の真の重要性を

11 Cf. "And as they were eating, Jesus took bread, blessed and broke *it*, and gave *it* to them and said, 'Take, eat; this is My body.'" (*The Gospel According to MARK 14:22*, italics original)

確信し、独自のプロテスタント的儀式を導入する (Pickering 201-02)。これが、カトリック、プロテスタント双方から攻撃を受ける原因となって Cranmer は追い詰められていくことになるのだが、上記の the Skeleton の最後の2行は、聖餐に対して信仰と感謝を何よりも重んじた Cranmer の態度をそのまま映し出す内容となっており、非常に巧みである。この意味でも the Skeleton が Cranmer に同化する立場を取っていることがわかるが、しかし、最後の最後に Cranmer を追い詰める台詞が吐かれるのである。

### 3. 意表を突く結末

前述のように、Cranmer は過去の自説を撤回する署名まで行すが、火刑宣告は覆されることはない。1556年3月21日、Cranmer は、自分の意思に反して神を否定し真実から目を背けてしまったことを悔い、自説撤回の署名をした右手を先に焼いて火刑を受け入れる――

... the writings

I let abroad against my heart's belief  
to keep my life. . . if that might be. . . that I signed  
with this hand, after I was degraded: this hand,  
which wrote the contrary of God's will in me,  
since it offended most, shall suffer first;  
it shall burn ere I burn, now I go to the fire,  
and the writings, all writings wherein I denied God's will,  
or made God's will but the method of my life,  
I altogether reject them. (58)

これはこの劇において、アクションとしてほとんど唯一の劇的な場面と言える。そこには堅固な信仰心と強い意志と真実から目を背けたことへの深い反省が滲

み、Cranmerの態度に何の揺らぎも見られない。まさにこの心からの後悔と真摯な悔い改めの言葉の直後、the SkeletonはCranmerでさえ意識していない心の奥底の本音を引きずり出すのである。<sup>12</sup>

THE SKELETON.

But I know all.

Friend, let us say one thing more before the world —

I for you, you for me: let us say all:

if the Pope had bid you live, you would have served him.

CRANMER. If the Pope had bid me live, I should have served him.

THE SKELETON. Speed!

CRANMER. Speed!

ALL THE PERSONS. Speed!

*[They all hurry out*

THE SINGERS. Glory be to the Father, and to the Son; and to the Holy Ghost;

As it was in the beginning, is now, and ever shall be: world without end.

Amen. (58-59, underlines mine)

the Skeletonが促すようにCranmerに掛けた言葉を、Cranmerはほぼそのまま繰り返す。“would”が“should”にすり替えられている点が、Cranmer自身の意思によるものなのか、必然と捉えているのかが判別しにくく、微妙な陰影を残す台詞になっている。しかし、それは、実はCranmerの内奥に潜む心の揺らぎや躊躇い、弱さ、死への怯え、引き返せるものなら引き返したいという思い、教皇に見捨てられたという悔しさなどを滲ませて、生々しいほどに人間的である。

12 処刑直前、現実のCranmerは下記のような言葉で最後の説教を締めくくっている——“And forasmuch as my hand offended in writing contrary to my heart, therefore my hand shall first be punished. For if I may come to the fire, it shall be first burned.” (Weatherall 192)。つまり、歴史に残るCranmerの最期の言葉はここまでなのである。

もともと Williams のこの劇は、従来の Cranmer 像——日和見主義者、意志に反して権力に身を寄せる人物、馴染みのない嵐の海を全力で漂い続けた人物——とは異なり、生涯誠実さを貫き、基本的なプロテスタントの原理に共感と支持を示した人物として描いたものである、と Browne は述べている (*Two* 103)。しかし、上記の最後の 1 行はそういった Cranmer 像をも超えている。the Skeleton は「最上の意図が自己欺瞞をほとんど伴わずに最悪の結果へと到るさまを示してみせる恐ろしいまでの巧みな技」を持つと指摘する Hadfield の言葉を引きつつ、Browne は、the Skeleton が Cranmer を追い詰める究極の終幕について次のように述べる——

From Cranmer, the Skeleton strips off layer by layer the 'curves of deception' until the very last layer, as we have seen, bares the totally honest man at the point 'where only saints settle'. It is a process of terrible wit, parallel with, yet more subtle than that of the Accuser in the book of Job; and the audience is not exempt from it... (*Two* 105)

Cranmer が図らずも吐露させられる本音は、自らの右手を焼く清冽な魂を汚すように見えながら、Browne はそこに「聖者だけが辿り着ける」域に到った人間の誠実さを見抜いている。それは、「ナイフの最後のひと捻り」(“Rhapsody on a Windy Night,” *Complete* 24) のように激しい痛みを伴いつつ、最後の 1 行で弱さを吐き出させ、Cranmer 自身にそれと直面させ、認めさせることで成立する。内奥に潜む弱さが引きずり出されることで強さに転じるというパラドクスを仕掛けることで、Williams は従来の Cranmer 像を打ち消している。「人間の動機は単純でもひとつでもなく、神の計画でさえ常に変わっている」とみなしていた Williams は「その曖昧さ自体を面白がり、(中略) 絶対的に肯定の道 (the Positive Way) に傾倒していた」と Browne は述べているが (*Two* 102)、この最後の場面に Williams の真髓が見て取れるのである。

Cranmer が最後に吐露させられる本音は Cranmer 自身の名誉を汚すことにな

るという批判もなされたようであるが、それに対して Williams は、それは現代の見方であって、「Cranmer の言葉はカンタベリー劇の中では明晰さと平安の勝利として使われている」(Dixon 48) と反論している。<sup>13</sup> このエピソードを紹介した Dixon は、Cranmer が自分の中心にある弱さをついに認めたという意味で勝利であり、the Skeleton はそれを引き出すことに成功したことになり、Cranmer は神と人の前で裸となり、あとは神の恩恵と火の成就に身を委ねるだけだと指摘している (48)。実際、Cranmer が「最期で究極の弱さを容認することでその力を完璧なまでに成就させた」終幕は「極めて感動的」であると指摘する *The Times* の劇評などもあり (Browne, *Two* 108)、先に述べた観客の戸惑いや混乱はこの最後の場面とは必ずしも結び付いていないことがわかる。

果たしてこの意表を突く結末を観客はどう受け止めたのか。それについては想像するしかないことであるが、観客に対して作者が何を目論んでいたかについては推測可能である。そのことを検証するために、その前年に同じ場所で上演された T.S. Eliot の *Murder* の終幕部分との比較を試みたい。

#### 4. *Cranmer* と *Murder* の終幕

Henry II との蜜月を経て確執・対立の末に騎士たちに殺害されるカンタベリー大司教 Thomas Becket の殉教劇 *Murder* の終幕も、*Cranmer* 同様に意表を突くものであった。<sup>14</sup> *Cranmer* との比較における着目点は3つある。第1に迫りくる死に対して本人はどのように向き合おうとしているのか、第2に意表を突く終幕の意味と効果について、第3に観客の心に訴えかける手法とは、の3点である。

13 聖ニコラス教会の教区牧師 V.T. Macy が *The Guardian*, July 3, 1936 に掲載したこの批判に対して Williams は *The Guardian*, July 10, 1936 で反論を行っているが Dixon は指摘している (47-48)、残念ながらその記事は確認できなかった。

14 *Murder* の詳細に関しては佐伯の拙著『T.S.エリオット詩劇と共同体再生への道筋』第3章を参照されたい。以下、*Murder* に関する言及はそれと幾分重複するところがあることをお断りしておく。



もともと Eliot は Becket を「自分が殺されるであろうということを予知して」(“Poetry and Drama” *On Poetry and Poets* 81) いる人物として設定していた。そのような Becket の前に誘惑者が現れ、死に向かって疾走する Becket の中に「殉教の野心」が潜んでいると指摘する。その予期せぬ指摘に衝撃を受け、激しい動揺と長い葛藤に苦しんだ末に、Becket は全てを神に委ねる決意に到る。彼はクリスマスの朝の説教で会衆に向かって、殉教者 Saint Stephen の死を引き合いに出しつつ、殉教について次のように語る――

... A Christian martyrdom is never an accident, for Saints are not made by accident. Still less is a Christian martyrdom the effect of a man's will to become a Saint, as a man by willing and contriving may become a ruler of men. A martyrdom is always the design of God, for His love of men, to warn them and to lead them, to bring them back to His ways. It is never the design of man; for the true martyr is he who has become the instrument of God, who has lost his will in the will of God, and who no longer desires anything for himself, not even the glory of being a martyr. (*Murder, Complete* 261)

誘惑者に指摘された「魂の高慢」と真摯に向き合い、それを見事に克服し、全てを神に委ねる決意をした Becket は実に晴れ晴れとしている。内面の疚しさも迷いも死に対する恐れも露ほども感じさせない。誘惑者ならぬ the Skeleton によって、最期で内奥の弱さと迷いを吐露させられた Cranmer とは鮮やかな対照を見せる。それは、聖別されるに到った Becket と日和見主義者として批判されてきた Cranmer との違いなのだろうか。興味深いことに、Eliot も Williams も、これまで歴史の中で持たれてきたそういった人物像を一旦は自ら観客に示しておきながら、そのイメージさえ覆すかのような結末を用意してみせるのである。それは、先に第2の着目点とした、意表を突く結末と関連する。

Becket が4人の騎士に取り囲まれて剣で刺し貫かれる場面は、神を中心に配した車輪のイメージを重ね――“the still point of the turning world” (*Four*

*Quartets, Complete* 173)——様式美さえ感じさせる演出で、見事に殉教を暗示してみせる。しかし、上記の説教で全てを神に委ねる決意をした Becket の晴れやかさは伝わるものの、どのように内的葛藤を乗り越えたかについては一切書かれない。<sup>15</sup> Eliot は敢えてその隙間を利用する。Becket 殺害後、騎士たちが観客に向かってそれぞれに弁明を行うのだが、最後の騎士 Richard Brito は、Becket の死は殉教などではなく「狂気の自殺」にすぎないと宣言するのである

... What I have to say may be put in the form of a question: *Who killed the Archbishop?* As you have been eye-witnesses of this lamentable scene, you may feel some surprise at my putting it in this way. But consider the course of events. ... This egotism grew upon him, until it became at last an undoubted mania. ... he insisted, while we were still inflamed with wrath, that the doors should be opened. Need I say more? I think, with these facts before you, you will unhesitatingly render a verdict of Suicide while of Unsound Mind. (*Murder, Complete* 279, Eliot's italics)

「観客への誘惑」(Jones 61) とも称せられるこの散文の場面に続いて、Becket の殺害に動揺する第一の司祭に始まり、何があっても揺るぎない教会の勝利を確信して神への感謝を口にする第三の司祭による韻文の場面が続き、最後に、ラテン語の「テ・デウム聖歌 (“Te Deum”)」が流れ、神の栄光を讃え、神に祈るコーラスの女たちの美しい韻文で締めくくられる。殉教劇で敢えて観客に向かって殉教を否定してみせるという大胆な手法をなぜ Eliot は取ったのか。<sup>16</sup>

15 Helen Gardner は殉教に向かう、あるいは神に委ねる自己を強く意識している Becket は「自己認識的、自意識的にならざるを得ず、自意識は聖性とは矛盾するものなのだ」と指摘している。(136 強調はガードナー)

16 この点に関してエリオットは次のように述べている——「この場面こそ私がこの劇を書いた主たる理由であり、私の主眼点をわかってもらえる唯一の方法はその騎士たちが観客に直接話しかけることなのです。」(*OPP* 81-82)

この場面の衝撃が大きく目立ってはいるが、上記のように「神なき世界」に対する嘆きも、教会の勝利への確信も、全てを受け止めた上での深い信仰と祈りも併記する形で示される。解決されることのない葛藤の中で、そのどれを取るかは観客に委ねられている。信仰が揺らぎつつある現代において、Eliotは観客に改めてBecketの殉教の意味を考えさせる「ショック療法」を目論んだのである。

それに対して、*Cranmer*の終幕はどうであろうか。前述のように、*Cranmer*は自らの過ちを正し、清廉な心持ちで神の恩恵と火の成就に身を委ねようとする瞬間に、the Skeletonによって思いがけなく内奥に潜んでいた弱さと迷い——“If the Pope had bid me live, I should have served him”——をさらけ出されるのである。観客にとっては、この最後のひと捻りは意表を突いたものであっただろう。しかしその直後、上に引用したように、the Skeleton、*Cranmer*、全ての登場人物が畳みかけるように叫ぶ“Speed!”という台詞が1行分の凝縮度で繰り返され、最後は神の栄光を讃えるコーラスの言葉で劇は締めくくられるのである。この劇全体の進行と観客の反応については*Canterbury Cathedral Chronicle* (No.24 13-14)に詳述されていることをDixonが紹介しているので、この最後の場面に関する箇所のみを引用する——

... the growing oppression of a trap closing in on Cranmer and on the mind, forcing out the reluctant desperate truth; black-gowned and masked Executioners with flames in their hands; Cranmer running, stumbling into the arms of the Skeleton, the final appalling clarity and then the cries, “Speed! Speed!” and the rush of the flames down the aisle and Cranmer pursued by the Skeleton flying after them. (Dixon 49)

畏が*Cranmer*に迫り、気が進まないながらも命がけの真実を絞り出す*Cranmer*に黒衣を纏い、マスクを着け、火を手にした死刑執行人が近づく。the Skeletonの腕の中に倒れこむようにして*Cranmer*が最後の本音を吐き出した後、こだま

のように響き渡る“Speed!”という叫びに乗せて、通路を疾走する松明と Cranmer、それを追って駆け抜けてゆく the Skeleton、それにかぶさるように響くコーラスの祈りの言葉、といった幕切れの疾走感は観客を巻き込む勢いがある。Williams は、日和見主義者という Cranmer のイメージを覆し、Cranmer の殉教に観客を寄り添わせることに成功していると言えるだろう。

## 結 び

*Murder* と *Cranmer* に関する評価を比べると、前述のように、*Cranmer* の方が概して辛い劇評が多い。観客の反応は必ずしも悪かったわけではないにせよ、*Cranmer* が再演されることはなかった。しかし、*Murder* がカンタベリーのロマン主義の伝統に新しい実験の道を拓き、*Cranmer* はさらに独創的になり戦後の発展の先駆けとなった、と Pickering は同等の評価を与えている (198-99)。実際 *Cranmer* の上演を観た Eliot は下記のような手紙を Williams に書き送っている——

I have been meaning to write to tell you how much I enjoyed and admired your play. ... I do really think that you made a great success of it, and I hope that it will be revived in London. (*Letters* 253)

Williams 自身、*Murder* を観ており、同じ Browne による演出で、その翌年の殉教劇上演ともなれば、*Murder* を意識しないはずはない。両詩劇を比べてみると、劇的手法は異なるものの、これまでのそれぞれの殉教者のイメージを覆してみせる大胆な展開を取り入れ、意表を突く結末で観客に揺さぶりをかけるといふ作者の姿勢は共鳴しているように思える。詩劇が演じられなくなり、信仰が揺らぎつつある時代に、教会の後押しを受けながらも、新しい足跡を残そうとした二人の作家の野心は共通していると言えるだろう。

## Works Cited

- Browne, E. Martin. "Introduction." *Four Modern Plays*. Ed. E. Martin Browne. London: Penguin Books, 1957. Print.
- . *Two in One*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981. Print.
- Dixon, James G. "Charles Williams and Thomas Cranmer at Canterbury." *Seven: an Anglo-American Literary Review* Vol. 5: 35-52. Illinois: Wheaton College, 1984. Print.
- Eliot, Thomas Stearns. *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969. Print.
- . *On Poetry and Poets*. 1957. London: Faber and Faber 1979. Print.
- Eliot, Valerie, and John Haffenden eds. *The Letters of T.S. Eliot, Vol.8: 1936-1938*. London: Faber and Faber, 2019. Print.
- Gardner, Helen. *The Art of T.S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1949. Print.
- Hadfield, Alice Mary. *An Introduction to Charles Williams*. London: Robert Hale Limited, 1959. Print.
- Jones, David E. *The Plays of T.S. Eliot*. London: Routledge & Kagan Paul, 1960. Print.
- Pickering, Kenneth. *Drama in the Cathedral*. Worcestershire: J. Garnet Miller, 1986. Print.
- Runcie, Catherine A. *The Free Mind*. Sydney: Edwin H. Lowe Publishing, 2016. Print.
- Sibley, Agnes. *Charles Williams*. Boston: Twayne Publishers, 1982. Print.
- Smith, Janet Adam. "Book Review." *The Criterion*. XVI.62 (Jan. 1936): 140-42. London: Faber and Faber, 1967. Print.
- Weatherall, Alan. *Cranmer: Theologian, Archbishop, Martyr*. Independently published, 2018. Print.

Wells, Bradley M. "The Call of Canterbury: The Festival Plays of T.S. Eliot and Charles Williams (1935-1936)." *The Free Mind*, 159-173. Print.

Williams, Charles. *Collected Plays*. Vancouver: Regent College Publishing, 2005. Print.

*Holy Bible: New King James Version*. Reader's Text Edition. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1990. Print.

佐伯恵子『T.S.エリオット詩劇と共同体再生への道筋』東京：英宝社、2012年。Print.